
短編の吹き溜まり

黒灰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編の吹き溜まり

【Nコード】

N2077BA

【作者名】

黒灰

【あらすじ】

一次創作短編もしくは中編の吹き溜まりです。一点突破的キャラクター造形でお送り致します。

灰 - 1 (前書き)

・ 童貞は想像することしか出来ない。

この日。

3年前に結婚して、去年連れを亡くしました。

それは、冬の日でした。

雪の降り積む日暮れ直ぐの時間です。茜から紺に空の色が変わる、ちょうどその時間帯でした。

私は、その当時交際していた女性にプロポーズしました。

一人の歩き道に、横断歩道の向こうにその人を見たので、つい。随分といきなりですが、私は叫びました。

「結婚して下さい」

そう叫ぶと、なかなか可愛らしく怒った顔でこちらに小走り歩いて来ました。

その横断歩道はあまり人気のないところでしたが、私の声がそれなり以上に大きかったので、聞いていた人は多かったのです。

今思えば、気まづくなることをやってしまった、と思います。

しかし、流石は我が恋人。

憤慨しながらもにやつきが浮かび、私の右頬を叩いたときは全力というもので照れを表現してくれました。なので、鼻息荒く左を差し出すと無視され、代わりに唇に接吻を贈られました。所謂一つのマーヴェラスというやつです。

そうして、私は彼女と結婚することになったのでした。

私と彼女の馴れ初めは、大学時代からでした。

同じ故郷で生まれ育ったのですが、幼・小・中・高、と尽く違つところへ。

そして、なぜか偶然県外の大学で知り合うに至りました。彼女と自分の関係は、所謂サークル仲間が始まりました。如何わしい活動もない、健全なサークルです。

当然です。盆栽サークルでしたから。皆真剣です。特に変わったことも有りません。

彼女には初恋、と言うものが有ったそうです。

それを聞かされたのはある程度親密になってから、余計なことを言えば、私が彼女に惚れてから3ヶ月頃です。惚れたきっかけはささいなことで、風になびく長髪に、不覚にも見とれてしまったことでした。

とても絵になる瞬間でしたとも。

緑深まる夏の日の一瞬の風でした。

風が吹いたので、私は作業を一旦止めてしまいました。

その時、しゃがみ込んでいたのですが、立ち上がって伸びをしました。

視界の端ではなく、真ん前直線距離3mほど。

そこに彼女は居ました。

左横顔が見えました。

耳の形もよく、鼻筋も非常に美しく通り、なかなか高い。

髪は長く、前髪は真ん中で分けられていました。

一瞬でした。

風は一息吹き、私は永遠に囚われました。

注意一秒恋一生。

ああ、なんとという事でしょう。

話を戻しましょう。

初恋の人の話を、酔った彼女から聞きました。

その日は成人を迎えたばかりの何人かで飲み屋に行ったのです。

男3人、女3人。

合コンというやつなのでしょうか。

しかし皆顔見知りというかサークル仲間でしたので、そういうことにはなりませんでした。

私はザルという、とてもアルコールに強い人間だったのほとんど酔っていないかったのですが、彼女は赤い顔でご機嫌。他の4人もそれよりひどい有様か、さらに酷く機嫌が宜しい。そこで、半ば愚痴のようにいきなり唐突に聞かされたのが、初恋の人についてのお話でした。

「その人はねえ、あれあ確かしょーがくの6年くらいかなあ」

「うーん、なんというかねえー、うん、男はつらかったよーって感じの人だったねえ、えへへ」

何と変わった初恋でしょう。

所謂灰になったような中年に惚れていたわけですから、正直に言うとしょっくです。

私は愕然としました。控えめに言うのと死にたくくなりました。まだ若い上に燃えている最中でしたから。

彼女の好みには合わない人間であることを、嘆きました。

やけになって手元にあったビールをいきなり一気飲みを試みたので、流石に急性中毒になりました。

油断した上に精神力もダメでしたので仕方ないことです。

病室で起きると、彼女に叩かれました。

右をやられました。至福です。

なので笑顔になると、彼女は少し驚いた顔になり、次に怪訝な表情を見せました。

また殴られました。それでも笑顔なのでまた。

どんどん気持ちよくなり、天にも登るような気分でしたが、登り切る前にお預けを食らってしまったのがそれなり以上の苦痛でした。初恋相手からの贈り物は、どんなもので嬉しいのです。たとえそれが悪意だとしても、痛みだとしても。私はその人を愛さずには居られなかったのです。

……悪意は言いすぎですね。

灰 - 2 (前書き)

・ 筆者の女性経験は皆無である。

それから、私はあの人にどう告白すべきか考えるようになりました。そのうち、まだ好感度が足りないぞ、と気付き、どうアプローチすべきかを考えるように。

まずは攻めの一手です。

話の続きを聞いていなかったたので、続きが聞きたい。そのようなことを彼女に言って、続きを促しました。それが病院に担ぎ込まれた二日後です。雪のよく積もった晩の、次の朝でした。

「うん、昨日会ったんだ、今年も」

なんと、現在進行形でしたか。

これは勝てない。

愕然としました。控えめに言うと、その中年を過去に戻って轢き殺したいほどに。

そんな私の心はいざ知らず、話は続きます。

「実はね、毎年同じ日、同じ時間、同じ場所でだけ会えるの。何故か分からないけど、気がついたらその人は隣にいてね」

何だか非常に運命的ではありませんか。

最早これまで。

ですが彼女の手前、もう一度急性アルコール中毒になるわけには行きません。流石に見放されず。

そもそも酒も手元にはないのですし。

その場を誤魔化す手段もないまま、話を聴き続けなければなりません。

しかし、語る彼女の笑顔が命綱となり私をつなぎとめました。今思えば、切ってやりたいです。

「うん、この前言ったっけ？小学6年生の時、ちょうど昨日の晩。あの日も、雪が結構降っててねー。不思議だけど、毎年同じくらい降るのよ、その日は。それで、傘差して信号が変わるの待ってたのよ。そしたら、いきなり隣にその人が現れてね。あと、その信号さ、変わるまで結構時間かかるのよ、3分くらい。まあ、気にする必要なんて無いくらいしょうもない場所なんだけど。結構真面目な子だったのよー私。毎日毎日なっがーい信号待ち。……なっがーいって言うほどじゃないか。三分だし。んー、来年カップラーメン持ってあげようかな」

どうやら長い話になりそうでした。

実際は長く有りませんが、15秒でも堪えられそうにない自分としては十分以上に長く感じられました。

死ねそうです。

しかし、笑顔が素敵すぎて生かさず殺さずの状態です。

慣れてくるとこの鬱さ加減が癖になってきました。息が少々荒いです。

ちなみに彼女はと言うと、所謂『入り込んでいる』状態でしたので幸いにも気づかれませんでした。

「で、実はね……そうだなー、2年くらい前かな？うん、二年だ。ちょうど高校3年だったや。その人にね、告白してみたのよ。何でだろ。毎年会ってるだけの全然知らない人なのにな」

殺す気なのではないでしょうか。

笑顔も何だか、はにかみが入ってきてて更に素敵です。
逆に笑顔の方に殺されそうです。

そもそも、何故話してくれたのでしょうか。
それを少し聞いてみると、ええ、微妙な心持ちになりました。

「うん、似てるの。あんた」

どうして。

灰 - 3 (前書き)

・
この男、変態である。

ちなみに振られていたようでした。
安心。

その憎つくき中年曰く、
「君にアホみたいに惚れ込む人間が現れたらそっちに告白したらどうだい」
とのこと。

何ですかそれは。
あてつけですか。
いいでしょう、やってやりましょうぞ。
アプローチ開始です。

まずは、相手を知るべきでしょう。

彼女は盆栽好きです。
ええ、私も盆栽好きです。
同じサークルに入っている時点でもう既に条件は満たしています。
別に変わったところはありません。

ふと思いました。
ひょっとしたら、彼女は中年好きなのでしょうか。
オジン趣味なのでしょうか。
枯れかけたのがええののでしょうか。
回りくどく聞いてみますと、どうやら察してくれたようで、答えてくれました。

「いや、多分その、特別なんじゃないかなあ……あの人だけはさ」

畜生。

いや、もしかすると自分も守備範囲内かもしれませぬ。良かった。

しかし、問題はそこではありません。

もつとも重大です。

癢です。悔しいです。でも聞かねばなりません。

仇敵の靴を舐めるような屈辱です。

親の仇に跪かねばならぬ心持ちを想像していただきましょう。

あなたはそれを初めは知らない。

そう、あなたはその仇に救われた、ように見せられているのです。

その仇はあなたを見て笑っているのです。

利用価値を見出し、その利用のために飼い慣らしているということです。

そしてついに靴を舐めても苦と思わぬ蛆虫にまで墮とされ、最終的にネタバラシです。

「お前の親を殺した相手の靴を舐めるのはどういう気分だと」

ええ、屈辱でしょう。最悪の気分でしょう。

殺してやりたい。しかし一度自分は跪いている。屈服している。どれほどの屈辱か想像できますでしょうか。

私は想像できますとも。ええ、親不孝者ではありませんもので。

例えとしては控えめですとも、はい。

それはそうと聞きました。

「あの、僕にどう似ているんですか」

「ああ、あのさ。この前ぶつ叩いたじゃん。ほっぺ。そういえばまだ謝って無かったや、ごめん。えへへ。許して？」

いいですとも。

むしろもつとやっってください。

続きを促します。

「その、あんたさ、何故か笑ったじゃん。あの時、びっくりしちゃった。それが似てるのよ。なんというかその、さ。本当に嬉しそうな顔しててさ。あの人のそれにやられちゃったというかねえ」

気持ち悪いという感想は無かったようでした。

流石女神は格が違います。

しかしまたあの中年の話です。

死にたくなります。

ええ、いつも通り彼女の笑顔を保養に相殺します。その時も素敵でした。

というわけで、私はよく笑うようになりました。

練習はしません。自然ではなくなりますし、もし間違った練習だったなら、無価値どころか負債になりますから。

現金な男と笑えば宜しいかと思えます。

しかし、どうしても気を引きたいのです。

初恋でしたので。

灰 - 4 (前書き)

・
これを書いていて酷く惨めになる。

そのうち、仲良くなって来ました。どれくらい掛かったか、具体的に言えば7ヶ月くらいです。必死でした。

見放されないように、好かれるように、愛が徐々に伝わるように、時には我慢、時にはアグレッシブにアプローチを掛けていきました。ええ、笑顔は忘れません。

自然でないわけではありません。幸せが湧いてくるのですから、その心の動きに顔の筋肉を任せていけばいいのです。我慢をしないのは打算有りきでした。

しかし、笑顔そのものは全く混じりっ気なしの心からのものであったと言います。

ええ、下心は純粋な内に入りますとも。

夏です。

またやってきた夏です。

厳密に言えば残暑です。しかしその年も厳しい暑さが残っていました。

前の年のその頃、私は彼女に惚れたのです。

また、同じような作業がありました。

当然です。植物を扱うのですから同じ時期に同じような作業をすることに何らおかしいところはありません。

しかし、これほど出来過ぎた日也没有せん。

構図が、同じだったのです。

彼女が私の前に立っています。

私はしゃがんで作業を続けています。

風が吹いたら、私は立ちます。

私は立ちますが、風になびく彼女の長い髪の毛、それに惚れ直します。

惚れ直した勢いで、告白するでしょう。

そして、そのまさか、同じ風が吹きました。

彼女は、前の年と同じく、風に向かって立ち、長い髪をなびかせていました。

同じようですが、少し違います。

あれから一年経ちました。彼女はまた美しくなりました。

化粧もより上手くなったように思います。眩しいです。それでも刮目します。見逃せません。

愛する人の美しい姿を見逃して何が片思いか、どうしてそれで懸想していると言えるのでしょうか。

視線を合わせられなくともその目を見つめていたいと、しかしそれではどうしても視線が合うだろう、それは恥ずかしいと、いやしかしそれでも見つめたい、とどうしようもない悩みが頭を回らないのであれば、そんなものは本物の恋などではありません。ただ恋に恋しているだけでしょう。しかし私は初恋です。言ってしまうればこれが本物かどうか判定しようがありません。しかし、それでも、これが恋なのだと信じています。涙が溢れました。

あまりに愛おしい、美しい。何て素敵な人なんだろう。もう、この人を見つめていられるなら、この人に見つめてもらえるなら、それだけで生きて行ける。その気持を、素直にぶつけました。

「好きです」

なんとというか、酷く青臭いように思えます。

なんせ私は初心者です。恋愛に関しては赤ん坊同然です。小学生以

下です。

この時まで色々策を打って来なかったわけではありませんが、あまりに稚拙でしょう。

ですから、バレバレだったわけです。

「今更だねえ」

回りには実は仲間が居ました。盆栽サークルの仲間です。

人の目など気にしない。

私の恋に関する基本方針がそれだったと、今思い返して気付きました。

「うん、私も結構好きだよ」

あれ。もしかしてライクでしょうか。

こちらのラブに気付いて頂けなかったんでしょうか。

出直しますか。もしかしてやり直しますか。

いいえ、まだ思いの丈の全てを語るには余りに序の口です。

こんなものではないのです。私の思いはそんな軽いものじゃないのです。重いのです。

「あなたの何もかもが好きです」

ええ、控えめに一言で纏めてしまいました。

「……………うん、分かったから……………その……………二度も言わなくても分かるよ」

顔が赤いです。ひよっとするとちゃんと意図が伝わっていたのではありませんか。

「私も、あなたの事好きだよ」

目を見てもらえませんでした。うつぶいて恥ずかしそうです。
ああ、死んでもいい。

貧血で私は倒れました。

医務室で目覚めると、右頬をまたぶつ叩かれました。

ここは天国なのでしょうか。

また笑顔になります。左を差し出しましたが、抱擁で返されました。
私も遠慮遠慮がちに抱きしめました。

彼女の情熱を免罪符に、私も途中から熱くやってしまいました。

私は、その時からあの時まで、ずっと幸福でしたとも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2077ba/>

短編の吹き溜まり

2012年1月6日19時48分発行